



一日一前

校長室通信

第 11 号

平成30年3月15日

3月 — オリンピックから生まれる言葉 —



先日、感動と名場面が数多く生まれたピョンチャンオリンピックが閉幕しました。私は夏のオリンピックよりも冬季オリンピックの方が身近に感じます。理由は中学1年の時に1968年に開催された第10回グルノーブル冬季オリンピックの記録映画を見て、映画の中で流れた作曲家フランシス・レイの「白い恋人たち」という音楽に魅了されたことや八木弘和という同級生がこの映画に影響され、オリンピックに出場するという夢を持ち、1980年のレークプラシッド冬季オリンピックのノーマルヒルジャンプで銀メダルを取ったことです。加えて札幌オリンピックにリージュ競技で出場し4位入賞した大高優子選手（愛称リンゴちゃん）が近所に住んでいることや冬季五輪には北海道の選手が多く出場していることなどから冬季五輪の方が身近に感じ、応援に力が入ります。

冬季五輪の歴史を調べると、第1回冬季オリンピックは1924年にフランスのシャモニーで開催され、クロスカントリー、ジャンプ、ノルディック複合、スケート、フィギュア、アイスホッケー、ボブスレー、カーリング、ミリタリーパトロール（バイアスロン）の9競技が実施されました。冬季五輪の開催には、当時、世界選手権を開催していた最強のスキー王国であるノルウェーやスウェーデンが反対したことやホテル建設やアクセスなど問題が山積みでした。しかし、フランス、スイス、オランダなどの国が粘り強く尽力した結果、なんとか開催が実現しました。その最初のオリンピックから数々の名場面、名選手、名語録が生まれ、現在に至っています。

私は冬季五輪で生まれた名語録に関心があり、ジャンプ 葛西紀明選手の「6回目のオリンピックで初めて満足の行くジャンプでした」、スケート 清水宏保選手の「オリンピックは狙って勝つからこそ意義がある」、フィギュア 高橋大輔選手の「自分は弱いですが、だからそれを埋めようと練習を一杯する」などです。特に、摂食障害を克服したフィギュア 鈴木明子選手の「ひとりでも多くの方が幸せになれるようなスケートをしたい」という言葉が胸に響きました。



それでは、ピョンチャン五輪ではどうだったのでしょうか。スケートの高木美帆選手は3つのメダルを取りましたが、これまで何回も夢を諦めかけ、挫けたことがありました。その時にオランダ人のデビットコーチは「俺だったら同じ人間なんだから自分もできると思うぞ」と助言していました。高木選手にとって大きな意識改革となり、今回の成功につながった一言でした。

また、カーリング女子で「そだねー（そうだね）」という北海道弁が話題となっています。試合の最中にチームの提案や助言に「そだねー」という肯定的な相槌が心地よいと評判です。肯定的な言葉でコミュニケーションを図ると明るく前向きでスムーズな人間関係を構築できます。ストレスがない円滑な人間関係からは長所が伸び、短所が改善され、組織の士気が上がるというデータがあります。



オリンピックには高校生の成長に役立つエピソードが埋まっており、「自分も頑張らないといけない」「自分もオリンピックを目指す」とやる気が引き出されます。今回は、私には「同じ人間なのだからできる」「そだねー」という言葉は意識改革のためには魔法の言葉だと感じました。